

セネガルの高等教育における 留学希望要因に関する研究

——ダカールとリヨンの事例をめぐって——

森 英 麻

はじめに

世界の留学生に占めるアフリカ人留学生¹⁾の割合は70年代からほぼ横ばいであり、2000年度は11%である [OECD 2003]。先進諸国の中でアフリカ人留学生の割合が最も高いのはフランスである。留学生全体に占めるアフリカ人留学生の割合はドイツで10%、イギリスで8%を占めるのに対し、フランスでは全体の49%と圧倒的である [Alain Coulon, Saeed Paivandi 2003]。そのうちの約半分をマグレブ諸国出身者が占め、残りの約半分をサハラ以南アフリカ出身者が占めている。

経済開発協力機構 (Organization for Economic Cooperation and Development, 以下 OECD という) によれば留学生の多くは卒業後もその国に留まるという。OECD による頭脳流出の定義では、大学生や大卒者も含まれている。頭脳流出とは、一度国外に出てしまうと母国に戻ってこないという問題である。多くの社会費用をかけて育てた人材の海外流出という側面から捉えれば国民経済の損失とみることができる。更に深刻なのは国内に留まっている高学歴者への影響であるという。国の開発に貢献する研究や仕事よりも、国際社会に認められることが行動規範になってしまう。マイケル P. トドロ、ステファン C. スミス (2004) は「おそらくもっと深刻なことは国内にとどまっている科学者や医師、建築家や技術者などの関心を、自国の重要な問題や国家の目標からそらせてしまったことである。(中略) かりに物質的には先進国に移住しなくても、彼らが取る行動の態度に関していえば、知的には移住したも同然なのである。このような『国内』の頭脳流出は、国外頭脳流出よりはるかに深刻な問題である。」と論じている。[マイケル P. トドロ、ステファン C. スミス 2004, 476-477]。しかし、当の本人からすれば合理的な選択であるという議論も少なくない。

頭脳流出という現象は発展途上国だけではなく、先進国でも存在する。たとえば、ヨーロッパ諸国はアメリカやカナダへの流出を防ぐためにこれまでも様々な政策を取ってきた。それらの国々の労働者たちは、数年就労した後に出身国に戻る傾向が強いことが報告されている [OECD

1) 本論文における「アフリカ」とはマグレブ諸国を含む。マグレブ諸国を含まない場合は「サハラ以南アフリカ」と記すこととする。

2002]。また、留学したとしても数年後には出身国に戻るので、深刻な問題と捉える必要がないとの見方が強まっている。一方、発展途上国とりわけアフリカにおいては常に深刻な問題である。高学歴労働者の流出率はガーナ、モザンビーク、シエラレオネは40%を超え、セネガルは24.1%である²⁾ [Ozden Caglar 2005]。

アフリカの頭脳流出や留学生についての研究は、マクロ統計データに依拠したものが多い。たとえば「MOT PLURIELS」³⁾には様々な角度から捉えたアフリカにおける頭脳流出についての論文が発表されている。それらのほとんどはその流出規模や、それによるアフリカ諸国の損害を論点として指摘している。また、政策に関するものも多いが、先進諸国の受け入れ政策や発展途上国のプッシュ要因が論じられている（例えば Francis N. Njibi 2002）。個人に焦点を当てた研究は少ないが、留学先での行動が主な研究対象とされている。アフリカ人留学生を対象とした研究として、Christine Renaudat (1998) がある。これは、ボルドー⁴⁾にいるアフリカ人留学生を対象とした研究である。研究の前半部分では、学生を出身国で分類し、奨学金の有無や居住形態等について比較分析を行ない、聞き取り調査の結果を多く載せて補足している。後半部分では、更に多くの聞き取り調査を用いて、アフリカ人留学生たちの生活や意識を分析している。しかし、学生のプロフィールについては出身国別に分けられているだけであり、どのようなバックグラウンドを持った学生たちを扱っているのか明確ではない。また、内容もアフリカ人留学生たちの苦勞話にとどまっている。

留学には手続き面や金銭面だけでなく人種差別といった様々な困難が付きまとう。それでも毎年多くのアフリカ人学生が留学を希望している。アフリカ大陸にも大学は少なくない。アフリカ人留学生の増加や頭脳流出が問題視されているにも関わらず、既存研究では留学の目的、動機など、アフリカで現在就学している人々に焦点を当てた研究がない。したがって、本論文ではアフリカで就学しつつ、海外留学を希望している学生、先進国で留學生活を送っている学生を対象とし、ミクロ・レベルでの研究を行なう。

本論文では留学希望者像を明確にするとともに、留学を希望する要因を明確にすることを目的とする。そして最後に、留学希望者と実際に留学している学生との間にどのような違いがあるか、また、その違いに関係している要因について考察を加えたい。送出国としてセネガルを、受入国としてフランスを、それぞれの事例とする。

まず、本論文のために実施した調査の方法、課題の背景とその歴史の概況をまとめて紹介する。次に、セネガルおよびフランスにおける調査結果を分析する。最後に結論および今後の課題を述べたい。

2) ちなみに、日本が1.5%、フランスが3.9%、BRICS（ブラジル、ロシア、インド、中国を指す）諸国が5%以下である。

3) アフリカの頭脳流出について研究している論文が多く掲載されているウェブサイト (<http://www.arts.uwa.edu.au/motspluriels/MP2002index.html>)。

4) フランス南西部に位置する都市。

I 調査方法と社会的背景

1. 実態調査の方法

実態を把握するために、アフリカからの留学生の受入国及び送出国での調査を実施した。調査地はフランス及びセネガルである。留学生を受け入れる側の調査国としてはフランスを選んだ。アフリカ人留学生全体の41%がフランスを選ぶ⁵⁾ [Alain Coulon, Saeed Paivandi 2003, 11-12] という事実が選定理由である。

本論文ではフランスのリヨンを調査地としている。2004年から2005年にかけて筆者はフランスの都市、リヨンに留学しており、そこでアフリカ人学生団体⁶⁾に所属していた。そのため、アフリカ人ネットワークへのアクセスが容易であり、限られた短い調査期間で調査目標を達成することが可能であった。リヨンはリヨンの全学生の5.2%にあたる6,753人⁷⁾という多くの留学生を抱える有数の都市である [Guillaume Vuilletet 2005, 95]。

留学生を送り出す側の調査国としては、サハラ以南アフリカの国からセネガルを選んだ。フランスにいるサハラ以南アフリカ出身学生数の第一位はセネガル出身である。セネガルには二つの公立大学が存在する。そのうちのひとつであり、長い歴史と多くの学部を抱える l'Université Cheikh Anta DIOP de Dakar (以下、ダカール大学という)があるダカールを調査地とした。

リヨンではリヨンに存在する3つの公立大学⁸⁾に在籍する学生を調査対象とした。また、ダカールではダカール大学に在籍する学生を調査対象とした。調査対象の選定は、ダカールおよびリヨンともに、所属学部や学年等に限定せず抽出した。調査期間は、予備調査が2005年6月から7月及び本調査が2006年2月から3月である。質問票は、二種類作り、本人のプロフィール、現在の生活、本人の意識等の質問項目を設けた。回答数はダカールで106、リヨンで47であった。聞き取り調査はアンケート調査の回答者の中から抽出し、質問票をもとに行った。アンケート調査分析には「SPSS」を用いた。

2. セネガル人の海外移住の規模

セネガルの経済財政省によると、海外移住しているセネガル人は約17万人⁹⁾と見積もられている [Ministère de l'Economie et des Finances 2004]。主な行き先はフランスと中部アフリカであ

5) 次いで多いアメリカ留学希望の14%との間に、大きな差がある。

6) AECAL (Association des Etudiants de Cultures Africaines de Lyon) という学生団体で、リヨン第二大学公認組織である。この組織は基本的に人種や国籍に関係なく誰でも入ることができる。しかしながら、当時は筆者が唯一のアフリカ外出身者であった。

7) トップは Paris で28,704人 (22.3%), 2位 Créteil で12,960人 (10.1%), 3位 Versailles で8,446人 (6.6%) に次いでリヨンは4番目に留学生の多い都市である。

8) Université Claude-Bernard Lyon 1, Université Lumière Lyon 2, L'université Jean Moulin Lyon 3 を指す。

9) p. 105 の表 11 は、これらの人々の滞在先やセネガルへの送金についての内訳を示したものである。

り、ヨーロッパが46%, UEMOA 諸国¹⁰⁾を含めたアフリカ諸国が43.9%と、この二つの地域が大半を占める。アメリカおよびカナダは、8%に留まっている [Ministère de l'Economie et des Finances 2004]。

同報告によると、移住の理由としては「セネガルに仕事がない」または「外国で仕事が見つかった」が60.7%を占める。これはインフォーマルセクター従事者を含む全ての労働者を含んでいるので頭脳流出と直接結びつくデータであるとは考えられない。これに次いで多いのが「学業」のための海外移住であり、10.3%である。学業のためにセネガルから海外へ移住する人々、すなわち留学生の8割以上がフランスに留学している [OECD 2003]。

前述の通り、フランスにおけるサハラ以南アフリカからの留学生のうち最も多いのはセネガル人留学生である。その数は2004年時点で8,020人である¹¹⁾ [Guillaume Vuilletet 2005, 93] そればかりでなく、その数が顕著な増加傾向にあるのも特徴的である。1980年のフランスにおける留学生数を100としたときの2001年の数値は、モロッコ151、アルジェリア143、チュニジア90であり、チュニジアに関しては減少傾向にある。これに対し、セネガルは282である。これは、20年前に比べて約3倍に増加していることを示しており、アフリカの国々において最も増加率が高い [Alain Coulon, Saeed Paivandi 2003, 15]。

3. ダカール大学の学生を取り巻く環境

2000年時点でのセネガルにおける高等教育就学率は4%である [Fatou Sow, Mamadou Guèye, Adama Fall et Ngagne Diakhaté 2000]。高学歴な父親を持つ子どもの21.5%が高等教育まで進むのに対して、無学歴の父親を持つ子どもにおいては5.6%である [Ministère de l'Economie et des Finances 2005b]。公立の高等教育機関は、ダカール大学と l'Université Gaston Berger Saint-Louis (以下、サンルイ大学という) がある¹²⁾。サンルイ大学はセネガル北部のモーリタニアとの国境付近に位置し、1990年に創立された新しい大学である。一方、ダカール大学は1915年にはすでに医学校として前身となるものが存在しており、1957年には現在に近いものとなった。現在の名称が使われるようになったのは1987年からである¹³⁾。

世界の大学の順位付けを行なっているウェブサイトによれば、アフリカ大陸にある大学トップ100中20位であり、旧フランス領の中でトップとされている¹⁴⁾。しかし、今日のダカール大学は実に多くの問題を抱えている。小川 (1998) は、ダカール大学を取り巻く環境について詳しく研

10) 西アフリカ経済通貨同盟 (UEMOA: Union Economique et Monétaire Ouest-Africaine) に加盟している国々のこと。ここではセネガルを除いたマリ、コートジボワール、ニジェール、ブルキナ・ファソ、トーゴ、ベナン、ギニアビサウの7カ国を指す。

11) アフリカからの留学生数上位はモロッコ (29,044人)、アルジェリア (21,764人)、チュニジア (9,130人) である。セネガルはこの3カ国に続き4位である。

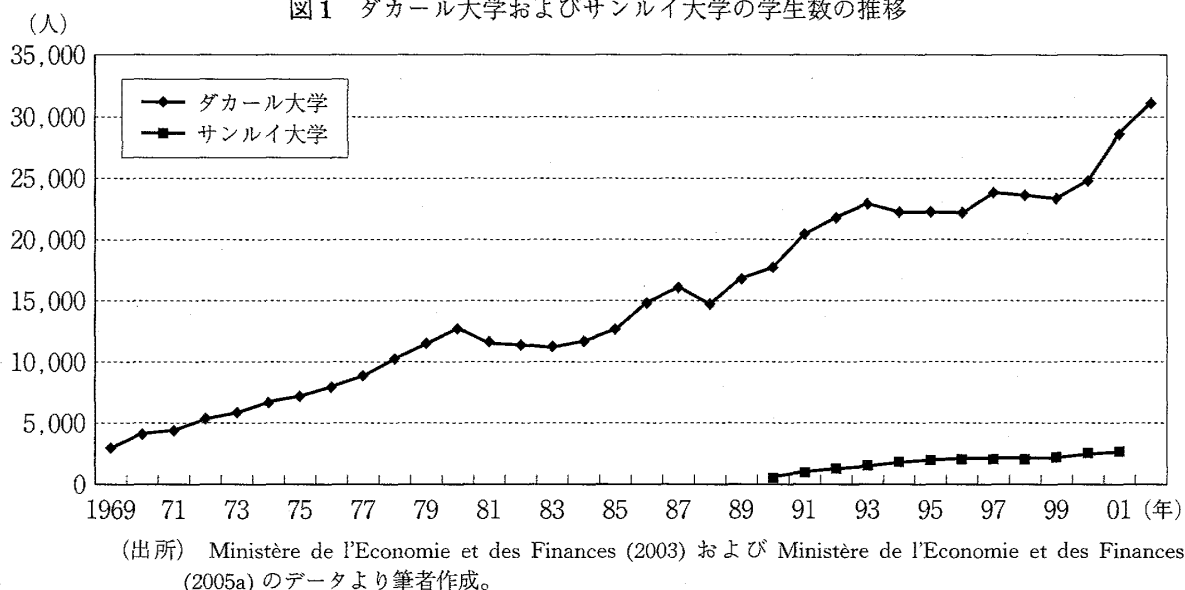
12) この他に公立の高等教育機関として高等師範学校もある。

13) ダカール大学ウェブサイト <http://www.ucad.sn/>

14) Webometrics Ranking of World Universities Web Site <http://www.webometrics.info/top100-continent.asp-cont=africa.htm>

究しており、セネガルはフランスの教育制度¹⁵⁾をそのまま取り入れたものの、学生の数、就学率、教員の数などに問題があると指摘している。

図1 ダカール大学およびサンレイ大学の学生数の推移



ダカール大学の適正規模は約5,000人の学生数とされているが、図1を見ると、1970年代にはすでにそのラインを超えていることがわかる。また、図には示されていないが、2004年度のダカール大学生数は37,192人であり、10年前の1.68倍になっている。このような問題の背景に、バカロレア取得者の増加にセネガルの教育制度が対応していないことなどが指摘されている [小川 1998, 158-166]。

ダカール大学の中で一番多くの学生を有するのは、文学・人文科学部であり、ダカール大学在籍者の46.1%を占めている。この学部には文学はもちろん、語学、社会科学なども含まれている。次いで、科学技術学部であり13.7%である [Ministère de l'Economie et des Finances 2005b]。

女性の学生数は年々増加しているものの、先に紹介した二つの大学の学生数に占める割合は25%ほどで、近年横ばいである [Fatou Sow, Mamadou Guèye, Adama Fall et Ngagne Diakhaté 2000]。

II 実証分析と考察

1. ダカール大学生のプロフィール

ダカール大学でのアンケート結果を分析する前に、アンケート回答者のプロフィールを明らかにしておきたい。以下、ダカール大学でのアンケート回答者をダカール大学生、リヨンでのアンケート回答者を在リヨン留学生と呼ぶ。

(1) 出身地域およびエスニシティ

まず、回答者の出身地およびエスニシティを明確にしたい。分析の都合上、地域を大きく三つ

15) ここでのフランス教育制度は2003年度以前の旧制度をさす。

に分けて検討することにした。第一はセネガル南部に位置するジガンショール州、第二は首都を含むダカール州、そしてジガンショール州とダカール州を除く地域を「その他の地域」とする。

エスニシティについては [Makhtar Diouf 1994, 17-50] を参考に分類し、どのエスニシティにも属さないものを「その他」とした。回答者の出身地域別とエスニシティは表1の通りである。セネガルでは居住地域とエスニシティに相関関係があることが広く知られているが、今回のアンケート回答者にもその傾向が強く見られた。

ジョーラは91.9%がジガンショール州出身者、残りの8.1%にあたる3人もコルダ州出身者であり、全員がセネガル南部のカザマンス地方の出身である。フルベおよびセレールはその他の地域出身者の割合が高かった。これは、フルベはセネガル北部や中央部に住み、セレールはチエス州やファティック州に住むと言われているとおりの結果となった。また、ウォロフはダカールをはじめ多くの地域で多数派となっているエスニシティであり、セネガル北部および中部ではウォロフが主要エスニシティとして多数を占めているが、セネガル南部ではウォロフはごく少数であるとされている。今回のアンケート回答者でも、ウォロフはダカール州およびカオラック州などのその他の地域に集中していた。反対に出身地域からみると、回答者全体の37.5%を占めるジガンショール州出身者はジョーラがほとんどである。全体の23.1%を占めるダカール州出身者はウォロフが45%を占め、39.4%を占めるその他の地域はセレール、ウォロフ、フルベが多い。

表1 回答者の出身地域およびエスニシティ (ダカール大学生) (単位: 人)

	ジガンショール州	ダカール州	その他の地域	合 計
ジョーラ	34	0	3	37
フルベ	2	5	6	13
セレール	1	5	19	25
ウォロフ	1	11	11	23
その他	1	3	2	6
合 計	39	24	41	104

(出所) 筆者調査による。

(注) $\chi^2=82.072$, $df=8$, $p<.000$ 。

欠損値=2。

(2) 家庭環境

次に、家庭環境についていくつかの点を確認する。まず、兄弟姉妹についてである。セネガルでは一夫多妻制が広くみられ、一般に異母兄弟であっても分け隔てなく兄弟姉妹として扱われるため、ここで扱うのは異母兄弟姉妹も含めた兄弟姉妹数である。5人から9人の兄弟姉妹を持つ学生が約半分を占め、兄弟姉妹数の平均は6.5人である。兄弟姉妹がいない学生は3% (106人中3人) とごく少数である。他方、「25人兄弟姉妹がいる」と答える学生もいた。兄弟姉妹の中で回答者本人が占める位置は様々である。

回答者の母親の職業は「主婦」や「無職」という回答が半数以上を占めた。また、母親の学歴が父親より高かったケース¹⁶⁾ はごく少数であった。このため、本論文では父親に注目すること

16) ダカール大学生では5件 (アンケート No. 19, No. 53, No. 73, No. 75, No. 83), 後述の在リヨン留ノ

とする。父親の職業では、「農業」に従事する父親を持つ学生が一番多く、全体の34%を占めた。父親が農業従事者である学生は、ジガンショール州出身者およびその他の地域出身者であり、ダカール州出身者の中では一人だけであった¹⁷⁾。次いで「役人」、「教師」が多い。

ただし、ここで注意すべきことは、職業分野での社会的な分類には限界があるという点である。「農業」従事者と言っても、土地無しの農民から大地主まで様々である。「役人」も大統領に近い人物から町役場に勤める者まで含む。職業分類と所得等とは必ずしも関係がないと思われる。本論文では、父親の職業別で考察を加えることはせず、ここでは参考として紹介するにとどめておく。

次に、父親の学歴については、回答者全体の4分の1の学生が学歴無しの父親を持っている。他方、高等教育まで終えた父親を持つ学生も全体の4分の1存在する。回答者の約半数が父親は「学歴なし」又は「初等教育まで」としており、残りの半数が「中等教育まで」もしくは「高等教育まで」という結果となった。

最後に、海外に住んでいる家族の有無について確認する。海外で働いているもしくは就学している家族がいる学生は、106人中49人であり、57人が在外家族のいない学生であった。

ダカール大学生の家庭環境をまとめると、平均6.5人の兄弟姉妹を持ち、その中で占める位置は様々である。父親の職業については農業従事や役人が多い。父親の学歴は無学歴を含む低学歴が約5割を占めている。また、約半数の学生は在外家族がいる。

(3) 経済状況

次に、金銭面を含む経済状況を確認する。表2は奨学金の有無とアルバイトの関係である。奨学金を受けている者は全体の62.9%にあたる66人である。アルバイトをしている者は12人と少数派であるが、そのうちの75%は奨学金も受けている。ダカールでは、高い失業率の下、アルバイトをしたくても働き口を見つけることができないというのが現状である。ダカール大学生のうちアルバイトをしている者の多くは、医学生でインターンをしているというものや、語学の修士課程に在籍し、英語の家庭教師をしているとなど学業に関係した仕事に従事していた。したがって、優秀な者ほど、奨学金をもらうだけでなく、アルバイトもみつけやすい傾向がある。アルバイトをしている12人の内訳はウォロフ6人、セレール4人、フルベ2人であり、ジョーラは一人もア

表2 奨学金の有無とアルバイト有無（ダカール大学生）（単位：人）

	奨学金あり	奨学金なし	合 計
アルバイトあり	9	3	12
アルバイトなし	57	36	93
合 計	66	39	105

（出所）筆者調査による。

（注）欠損値=1。

＼学生では3件（No. 18, No. 44, No. 45）がこれに該当する。

17) 父親が農業をしているのは、ジガンショール州出身者19人、その他の地域出身者14人であった。

アルバイトをしていなかった。

次に、住まいについては、家族と同居する学生が最も多く、55%を占めている。次に多いのが大学寮に住んでいる学生で、32%である。

(4) 専攻分野

ダカルル大学生が在籍している教育課程および専攻している学問分野について述べる。表3は教育課程と専攻を表したものである。

表3 回答者の教育課程と専攻（ダカルル大学生）

（単位：人）

	学士課程	修士課程	博士課程	合 計	ダカルル大学学部別在籍者数*1
法 学	10	0	0	10	3,837
経 済・経 営 学	10	20	2	32	3,374
文 学	3	0	1	4	14,360
語 学	10	2	0	12	
社 会 科 学	15	2	0	17	
生 命 科 学	10	2	0	12	4,278
応 用 科 学	2	0	0	2	3,771
そ の 他	1	0	0	1	1,547
合 計	61	26	3	90	31,167

（出所） 筆者調査による。ダカルル大学学部別在籍者数は Ministère de l'Economie et des Finances (2005a) による。

（注） *1 ダカルル大学では Faculté de Lettres et Sciences Humaines（文学・人文科学部）に文学、語学、社会科学が含まれているが、リヨンに合わせるため本論文では細かく分類している。
欠損値=16。

フランスでは2003-2004年度から¹⁸⁾、セネガルでは2004-2005年度から学士課程、修士課程、博士課程という分類方法の新制度に変わったため、この方法で分類した。しかし、ダカルル大学生たちはこれまでの旧制度¹⁹⁾に慣れており、新制度をまだ理解していない学生も多かった²⁰⁾。教育課程を見ると、学士課程に在籍する者が多く、大半は文科系を専攻している。修士課程に在籍する者の大半が経済・経営学を専攻している。表右端のダカルル大学全体の人数を見ても、文科系が多いことがわかる。

(5) 性別および年齢

最後に、性別および年齢について述べる。男性が8割程度、女性が2割程度であった。平均年齢は男性が24.7歳、女性が22.3歳、全体が24.1歳である。ダカルル大学生において女性は若年に多く、男性では年齢層が高いという有意差が確認された。このような有意差はダカルル大学全体にもみられるものなのかは未確認である。

18) フランスでは2003-2004年度から EU 諸国共通の学位制度の導入が開始された。

19) セネガルの教育旧制度については [小川 1998, 156-168] に詳しい。

20) 新制度導入に伴い、「自分の在籍課程がどこにあたるのかわからない」と言う学生には、筆者が新旧の大学教育システムについての説明を加えて本人に分類してもらう、もしくは、回答者自身が在籍する課程を書いてもらい、後で筆者が分類するという方法を使った。

2. ダカール大学生の留学希望

以下、ダカール大学で実施したアンケート結果を検討し、どのような要因が留学希望に影響しているのかを明らかにする。「留学を希望するか」という質問に対して「留学希望する」と答えた学生²¹⁾が84.8% (105人中89人), 「留学希望せず」と答えた学生が15.2% (16人) であった。大半が留学希望であるのに対し、少数ではあるが留学ではなくセネガルに留まることを望む者がいる。

このような留学希望の是非を分ける要因について考察を加える。本論分では表4にある5つの項目について検討する。表のカイ二乗検定欄に示したとおり、これらは統計的に有意な差が確認された項目である。以下で考察を加えることにしたい。

表4 本論文で検討する項目一覧

		留学希望せず (人) (%)		留学希望する (人) (%)		カイ二乗検定	欠損値
在外家族の有無	在外家族あり	12	25	36	75	$\chi^2=6.524$ $p<.011$	1
	在外家族なし	4	7	53	93		
出身地域	ジガンショール	1	2.6	38	97.4	$\chi^2=8.789$ $p<.012$	1
	ダカール	4	16.7	20	83.3		
	その他の地域	11	26.2	31	73.8		
性 別	男 性	9	11.1	72	88.9	$\chi^2=4.673$ $p<.031$	1
	女 性	7	29.2	17	70.8		
セネガルの生活に満足しているか	満足している	14	22.6	48	77.4	$\chi^2=6.125$ $p<.047$	2
	満足していない	2	4.9	39	95.1		
	どちらとも言えない	0	0	1	100		
海外移住は幸運だと思うか	幸運だと思う	2	3.4	56	96.6	$\chi^2=15.177$ $p<.001$	8
	幸運だと思わない	12	31.6	26	68.4		
	どちらとも言えない	0	0	2	100		

(出所) 筆者調査による。

(1) 在外家族

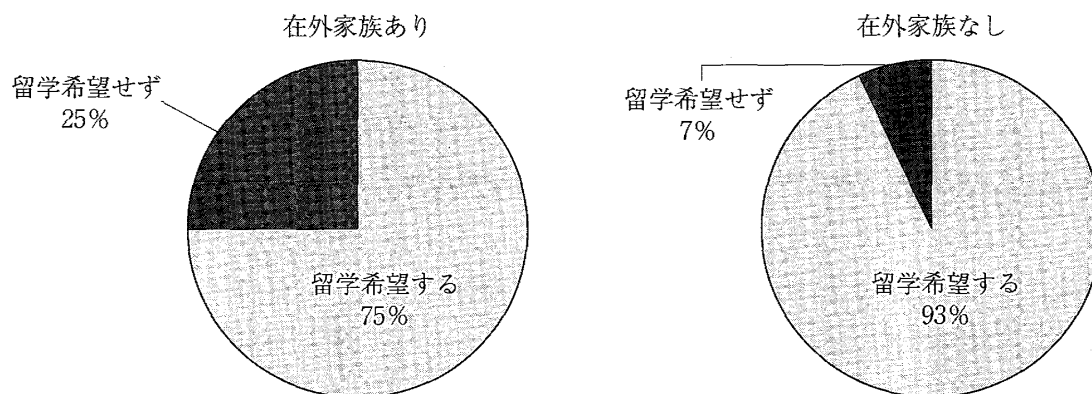
すでに見たとおり、在外家族がいる学生が49人、在外家族がいない学生は57人であった。「留学を希望するか」という質問に対する結果は、図2のとおりである。在外家族がいる学生では「留学希望する」75% (48人中36人), 「留学希望せず」25% (48人中12人) である。一方、在外家族がいない学生では「留学希望する」93% (57人中53人), 「留学希望せず」7% (57人中4人) という有意な差が確認された。

在外家族がいれば、様々な面でのサポートが得られるため留学希望者の割合は高くなるという予測に反した結果となった。

類似の結果が、海外移住観にも表れている。表5は、「海外移住は幸運だと思うか」という質

21) 「留学を希望する」と答えた学生の希望留学先は、在外家族の有無に拘らず、「フランス」が一番多く、次いで「カナダ」が多かった。

図2 在外家族の有無と留学希望



(出所) 筆者調査による。

問に対する結果を在外家族の有無によって分けたものである。在外家族の有無によって海外移住に対する意識に差があることがわかる。在外家族がいる学生の場合、45.5%（44人中20人）が「海外移住は幸運だと思う」と答え、52.3%（44人中23人）が「海外移住は幸運だと思わない」と答えた。それに対し、在外家族がいない学生では、70.4%（54人中38人）が「海外移住は幸運だと思う」と答え、27.8%（54人中15人）が「海外移住は幸運だと思わない」と答え、有意差が確認された。このことから、在外家族がいる場合、在外家族がいない場合に比べて海外移住に対して慎重な考えを持っていることがわかる。このような差は、在外家族からネガティブな内容を含めた多面的な情報が入ってくることによるものと考えられる。

表5 在外家族の有無と海外移住についての認識

(単位：人)

	幸運だと思う	幸運だと思わない	どちらとも言えない	合 計
在外家族あり	20	23	1	44
在外家族なし	38	15	1	54
合 計	58	38	2	98

(出所) 筆者調査による。

(注) $\chi^2=6.316$, $df=2$, $p<.043$ 。

しかし、在外家族がいる学生が、必ずしも多面的な情報を得ているとは言い切れない。それにはいくつか理由がある。一つは、情報の送り手側の事情である。情報の送り手、すなわち在外家族が海外生活上の悩みや困難をセネガルにいる人々に語らないことがある。たとえばリヨンにいるセネガル人学生は次のように語っている。

一番の問題はセネガルが物質社会であること。物をもらったりお金をもらったりすることに価値を見出し、フランスやヨーロッパや北米で働いている人々がヴァカンスでセネガルに戻ってきてお金をばら撒いたり、みんなに物を配ったりする。リッチな暮らしをして見違えるようにたくさんのお金を抱えて戻ってくる。でも彼らは道端でCDを売ったり、清掃の仕事やセキュリティの仕事をしたりして、こつこつ貯めて何年も経ってからセネガルに戻っ

てくる。そして、本音は語らない。「調子はどうだい」と聞かれても「うん、万事うまくいってるよ」「向こうでの生活は良いよ」と答えるだけ。でも、実は公的な身分証明もなく、常に警察にびくびくして生活していたりする。僕の友達の中に何人かイタリアに行った人たちがいる。彼らはフランスの滞在許可証の期限が切れる前に大学を退学してイタリアに行った。そっちのほうの方が稼げて条件が良いと思ったらしい。(中略)

とにかく行けば「バラ色の人生」が待っていると信じている。向こう（フランス）で待ってる困難について誰も語らないから。僕が行くときにもフランスにいる叔母（フランスで働いている）は何も言ってくれなかった。(中略)

こっちでの生活はたくさんの困難がある。それを前回ワカム²²⁾に戻ったとき（2005年7月）に数人に語った。彼らは「ありがとう、そういう話を話してくれたのはおまえが初めてだ。感謝する。考え直してみる。」と言っていた。甥（留学を希望している）にも語った。そういういろいろあることを知ってから決断するべきだから、決断してフランスに来ることにしたら電話をくれと言っておいたがまだ電話はない。(中略)

叔父の友人が93年から94年にフランスにいて、その人だけは（フランスでの生活や苦労話など）いろいろ教えてくれた。彼は通貨切り下げで奨学金が足りなくなって帰国した。(32歳、男性。リヨン第三大学、学士課程、経済学専攻。)

この男性は、海外にいる人々が家族や友人に海外の生活について何も語らない、もしくは良い生活をしていると周囲の人に誤解をされるような態度を取っていると話している。彼が留学する前からフランスには叔母がいたが、彼女は彼にフランスでの生活については何も語らなかった。しかし、運よく叔父の友人に話を聞くことができたと言う。

また、情報の受け手側の事情によって情報が絶たれてしまうこともある。外国で「バラ色の人生」を送っていると信じきっている人に、金銭面等の苦労話をしても聞く耳を持ってもらえないと主張する学生もいる。

セネガルの家族や友達みんな「フランスにいて＝お金がある、たくさん稼いでいる」だと思っている。お金の相談を何回も断っていると彼らとの関係が変わってくる。今はほとんど連絡を取っていない。(28歳、男性。リヨン第二大学博士課程、社会学専攻。)

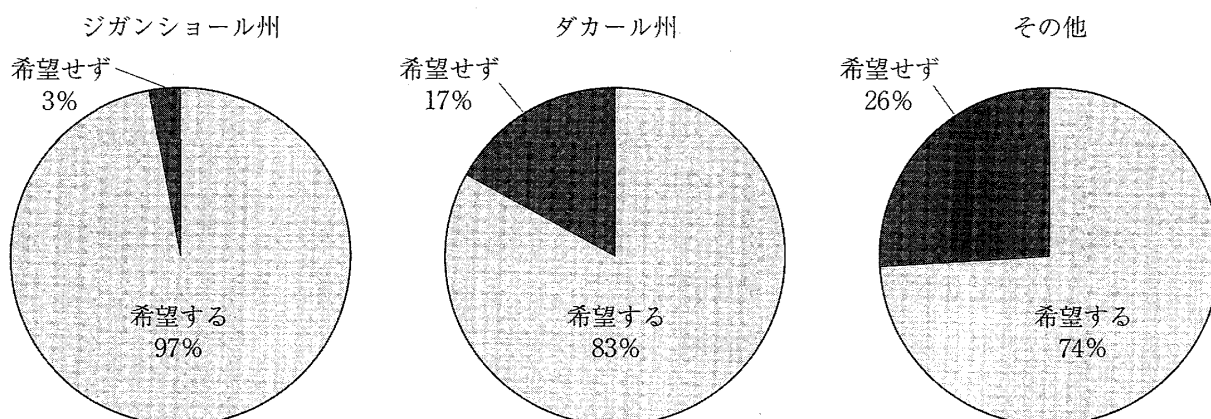
情報を受ける側、送る側に存在する別々の事情によって、在外家族がいる場合に必ずしも多面的な情報が学生に伝わっているとは限らないということが指摘できる。このような状況を何らかの形で変えることが可能になればさらにセネガルに留まるという選択をする者が増えると考えられることもできる。以上のようなことから、在外家族がいない学生に留学希望の傾向が強いことがわかった。在外家族がいる学生の場合、ネガティブな内容を含む情報を得ることで留学に慎重になり、その結果セネガルにとどまるという選択肢を選ぶという流出抑止の力が働くと考えられる。

22) ダカール近郊の漁村。この学生の実家がある。

(2) 出身地域

次に、出身地域について検討する。前述の通り、学生の出身地を3つの地域に大別した。すなわち、ジガンショール州出身者39人、ダカール州出身者24人、その他の地域出身者42人である。図3はこれら3つの出身地域別の留学希望の有無の割合である。まず、ジガンショール州では97% (39人中38人) が「留学希望する」、2% (39人中1人) が「留学希望せず」と答えた。ダカール州では、83.3% (24人中20人) が「留学希望する」と答え、16.7% (24人中4人) が「留学希望せず」と答えた。その他の地域では、73.8% (42人中31人) が「留学希望する」と答え、26.2% (42人中11人) が「留学希望せず」と答えた。

図3 出身地域別留学希望の有無の割合



(出所) 筆者調査による。

これらの地域は、自然環境が異なるだけでなく注目すべき地域差が指摘できる。まず、首都のあるダカール州とそれ以外の地域の差では、開発の進み具合や、貧困者比率²³⁾ などがある。首都のあるダカール州は開発の恩恵を受けて発展の一途をたどっている。それ以外の地域との開発の差は拡大する一方であり、首都への人口集中は急激である。

セネガル南部において、カザマンス地方の独立運動²⁴⁾ は開発の後進性に不満を持ったことがきっかけという説もあるほど [Makhtar Diouf 1994, 136-139] ダカール州との格差は大きい。また、貧困者比率²⁵⁾ でも大きな差がある。貧困者比率は、ダカール州では33.6%であるのに対し、ジガンショール州では67.1%、その隣に位置するコルダ州では66.5%である [Ministère de l'Economie et des Finances/World Bank 2004]。セネガル全土で最も貧困者比率が高いのがジガンショール州、最も低いのがダカール州なのである。

このような貧困者比率の高さにもかかわらず、ジガンショール州の就学率は極めて高い。各地

23) 総人口に占める貧困ライン以下の人々の比率のこと。貧困ラインとは、実質所得の国際的な測定基準として便宜的に定められたもの [マイケル P. トダロ, ステファン C. スミス 2004, 975]。貧困ライン以下人口 H を、総人口 N の一部だとすると、貧困者比率 = H/N と定義することができる。

24) 1982年以降、カザマンス地方において独立を求める運動が武装化し不安定な状況が続いていた。2004年には和平合意に至ったが、依然として武力抗争が起こっている。

25) ここでの貧困ラインは、成人1人あたり2400キロカロリー/日を摂取できる購買力の有無である [Ministère de l'Economie et des Finances/World Bank 2004, 7-13]。

域の就学率を比較すると、ジガンショール州は99.1%、ダカール州86.3%、その他の地域では平均61.6%である [Ministère de l'Education Nationale 2000]。ジガンショール州は常に男女ともに就学率が高く、セネガルでトップでありここ数年入れ替わっていない。

ジガンショール州の就学率が他の地域に比べてこれほど高い理由は明らかではない。農業が盛んな地域での就学率は低いのが定説である。これは、子どもの機会費用が都会と比べて大きいことが理由とされている [マイケル P. トダロ, ステファン C. スミス 2004, 473]。実際に、農業が盛んなその他の地域を見ると、一番就学率が低いジュールベル州では40.4%である [Ministère de l'Education Nationale 2000]。一説によると、ジガンショール州にはキリスト教信者が多いジョーラが住んでいるため、キリスト教系の慈善団体や NGO の援助を多く受けており、これが就学率を押し上げているという説もあるが、真偽は確認されていない。

学生の父親の学歴と出身地域には、統計的に強い相関がみられた。学生の出身地域別の父親の学歴は表6である。ジガンショール州出身者の父親の学歴は一般的に低い。

ダカール出身者には高学歴者の親を持つ者が多いが、それ以外の地域出身者には、学歴無しや初等教育までの親を持つ学生が約半分である。

表6 出身地域別父親の学歴 (ダカール大学生)

(単位:人)

	学歴無し	初等教育まで	中等教育まで	高等教育まで	合 計
ジガンショール州	10	11	11	4	36
ダカール州	4	1	5	14	24
その他の地域	13	9	9	10	41
合 計	27	21	25	28	101

(出所) 筆者調査による。

(注) $\chi^2=18.800$, $df=6$, $p<.005$ 。欠損値=5。

ダカール州では、学歴無しが16.7%、初等教育までが4.2%とこれらを合わせても2割ほどであり、高等教育までの者が6割を占める。一方、ジガンショール州出身者では、学歴無しが27.8%、初等教育までが30.6%とここまでの6割近くを占めており、高等教育までの者はわずか11.1%である。その他の地域はジガンショール州の結果に近い。

学歴は所得と強く相関している。アンケート調査では所得データを得ることができなかったため、ここでは、学歴が示す既存のデータを紹介する。表7はセネガルの男性世帯主の学歴と年収の関係である。セネガル全体では無学歴の男性が世帯主の世帯が最も多く、高学歴者が世帯主の世帯は少数である。表右端の年収は表中央の年収を筆者がユーロ換算したものである。学歴なし世帯では188.91ユーロなのに対し、高学歴者が世帯主の世帯では4,438.83ユーロである。学歴無し世帯と高等教育世帯では平均年収に20倍以上の差が見られるのである。ただし、このデータはダカールで行った調査結果に限定される。

貧困者比率がダカールより高いと言われているダカール以外の地域で、この結果より学歴無しおよび初等教育までの学歴の世帯主世帯の年収が大きく上回るようなことがあるとは考えにくい。したがって、このデータから確認できる年収の大きな差は参考になるであろう。

表7 男性世帯主の学歴と平均年収

	世帯数	年収(単位:FCFA ^{*2})	年収(単位:ユーロ)
学歴無し	549,589	123,737	188.91
初等教育	60,973	480,680	733.86
中等教育(第一段階) ^{*1}	31,151	1,022,277	1,560.73
中等教育(第二段階)	19,561	1,455,474	2,222.10
高等教育	27,882	2,907,434	4,438.83

(出所) Fatou Sow, Mamadou Guèye, Adama Fall et Ngagne Diakhaté [2000] より筆者作成。

(注) *1 本論文では第一段階および第二段階を合わせて中等教育として扱っている。

*2 FCFA (フランセーファ) は対ユーロレートが固定であり, 1ユーロ=655 FCFA である。
1円=4.45 FCFA (2006年7月現在)。

そこで, このデータ (表7) と, 前述の出身地域別の父親の学歴 (表6) を照らし合わせると, ジガンシヨール州出身者の父親は, 学歴が低いため, 収入も低いと推定できる。

以上のような, 貧困者比率の高さ, 就学率の高さ, 父親の学歴および収入の低さはジガンシヨール州の特異性を表しているであろう。

(3) 性別

女性よりも男性のほうが留学を希望する傾向が強いという結果が得られた (表4)。留学だけでなく, 海外移住についても, 女性よりも男性のほうが肯定的なイメージを抱いている。表8は「海外移住は幸運だと思うか」という問いの結果を性別で見たものである。男性では65.8%が海外移住は「幸運だと思う」と答え, 「幸運だと思わない」のは32.9%に留まるのに対し, 女性では「幸運だと思う」のは31.6%であり, 「幸運だと思わない」のは63.2%であり, 有意差が確認された。また, 「セネガルに満足か」という問いに対しては性別で有意な差は確認されなかったものの, 女性においては80%²⁶⁾ がセネガルの生活に満足していると答えているのである。このような性別による意識の差について検討する。

表8 海外移住は幸運だと思うかと性別との関係

(単位:人)

	幸運だと思う	幸運だと思わない	どちらとも言えない	合計
男性	52	26	1	79
女性	6	12	1	19
合計	58	38	2	98

(出所) 筆者調査による。

(注) $\chi^2=7.848$, $df=2$, $p<.020$ 。欠損値=8。

アフリカ女性の頭脳流出の要因を論じた研究に Angèle Bassolé (2002) がある。頭脳流出におけるアフリカ女性特有の理由として, 文化的規律に縛られたり, 高学歴であるがゆえに男性に敬遠されて結婚相手がみつかりにくかったりすることがあげられるという。すでに留学を実現している, もしくは留学を希望する女性の理由としてそういう側面があるであろう。しかし, 今回のアンケートでは女子学生がセネガルに留まることを希望する傾向があるという結果が得られた。

26) 男性において「セネガルの生活に満足している」と答えた学生は53.8%にとどまった。

セネガル人女子学生が、男子学生より留学希望志向が低いことを説明する要因はいくつか考えられる。第一に、労働市場について考えてみると、セネガルは必ずしも女性が働きにくい環境ではない。確かにセネガルではジェンダーの問題は大きく、就学率や識字率、政治参加など多くの場面で女性は男性に比べてハンディキャップを背負っている [Fatou Sow, Mamadou Guèye, Adama Fall et Ngagne Diakhate 2000]。しかし、ある調査結果によると、高学歴女性の失業率は9.4%であり、男性の高学歴者の失業率12.6%よりも低い [P. Antoine, P. Bocquier, A. S. Fall, Y. M. Guisse, J. Nanitelamio 1995, 135-138]。そして、高学歴の失業者において、一度も働いたことのない者の割合は女性59.6%に対して男性は73.6%である。このように、高学歴女性の場合、失業率が男性よりも低いだけでなく、一度も働いたことがない者の割合も低いのである。

独身女性は独身男性よりも多く稼いでいるというデータもある [Fatou Sow, Mamadou Guèye, Adama Fall et Ngagne Diakhate 2000]。聞き取り調査の中でも、「就職の際、同じ学歴を持っていたとしたら男性よりも女性の方が就職しやすい」という話を聞いた。更に、生活環境も女性の意識に影響している。「家族のそばにいたい」という声を聞き取り調査の中で多く聞いた。セネガルでは子育てと勉強もしくは仕事との両立に困らないということも影響しているであろう。大勢の家族が子供の面倒をみてくれ、家事使用人を雇うのが当たり前となっているからである。

(4) セネガルの生活に満足しているか

セネガルの生活に満足している学生では77.4%が「留学希望する」と答え、22.6%が「留学希望せず」と答えた。一方、セネガルの生活に満足していない学生では95.1%が「留学希望する」と答え、4.9%が「留学希望せず」と答えた。セネガルの生活に満足している人がセネガルに留まるのは当然であろう。

表9 セネガルの生活に満足かどうかと在外家族の有無の関係

		在外家族の有無				合　　計		カイ二乗検定
		在外家族あり		在外家族なし				
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	
セネガルの生活に満足しているか	満足している	40	63.5	23	36.5	63	100	p< .000
	満足していない	9	22	32	78	41	100	
	どちらとも言えない	0	0	1	100	1	100	
合　　計		49	46.7	56	53.3	105	100	

(出所) 筆者調査による。

(注) 欠損値=1。

学生がセネガルの生活に満足しているケースは、在外家族があることと正の相関をしめした。表9は「セネガルの生活に満足しているか」という質問に対する答えと在外家族の有無との関係を示したものである。「満足している」と答えた学生のうち、63.5%は在外家族がいる学生であり、在外家族がいない学生は36.5%である。「満足していない」と答えた学生のうち、22%が在外家族がおり、78%が在外家族がいない。この相関関係は非常に強いので、その原因を考えてみ

たい。まず、すでに(1)では在外家族の有無が学生の留学希望に与える影響として在外家族から得られる多面的な情報という点について考察した。「セネガルの生活に満足しているか」という問いに対する答えにも、前述の多面的な情報が影響していると思われる。在外家族の苦労話などを耳にすることで、自分自身のセネガルの生活をあらためて考えるきっかけになっているのであろう。

もうひとつ考えられるのは、在外家族からの送金によってセネガルの生活が比較的余裕のあるものになっている可能性である。一般的に、セネガル人海外移住者全体の42%が定期的に、31%が不定期的に、セネガルにいる家族に送金している [Ministère de l'Economie et des Finances 2004]。他方、先進国滞在者のほうが送金する率が高い。表10は海外移住者の滞在先と家族への送金についてのものである。UEMOA 諸国滞在者は60%が、その他のアフリカの地域滞在者は65.4%が何らかの形で家族に送金している。一方、ヨーロッパ滞在者では80.1%，アメリカ・カナダ滞在者では79.1%がセネガルに送金している。

表10 海外移住者の滞在先と家族への送金

滞在先 \ 送金の有無	送金している				全く送金していない		合 計	
	定期的に送金		不定期的に送金					
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
UEMOA 諸国*	5,120	22.1	8,766	37.9	9,244	40.0	23,130	100
その他のアフリカ	14,087	27.7	19,185	37.7	17,561	34.5	50,833	100
ヨーロッパ	43,278	55.7	19,504	25.1	14,933	19.2	77,715	100
アメリカ・カナダ	6,061	48.0	3,930	31.1	2,642	20.9	12,632	100
そ の 他	1,885	44.6	759	17.9	1,583	37.5	4,227	100
データ無し	0	0.0	0	0.0	309	100	309	100
合 計	70,432	41.7	52,143	30.9	46,272	27.4	168,847	100

(出所) Ministère de l'Economie et des Finances (2004) のデータより筆者作成。

(注) *本文脚注10参照。

調査対象となった学生の在外家族滞在先を国別に比べると、一番多い国はフランスで35人、次に多いのはアメリカ、そしてイタリアである。地域別で見ると、ヨーロッパが最も多く51人である。そして北米が15人であり、アフリカはモーリタニアの1人だけであった²⁷⁾。このように、大半の在外家族はヨーロッパや北米に滞在していることから、在外家族を持つ学生の家庭では海外からの送金を受け取っている可能性が高い。海外からの送金によって暮らしが比較的楽になり、セネガルの生活に対して満足している、という認識に至ったという側面もあろう。

セネガルの生活に満足している学生と満足していない学生の間に、経済面（奨学金の有無、奨学金以外の補助、アルバイトの有無、父親の学歴など）およびプロフィール面（出身地域、エスニシティ、性別、年齢、兄弟姉妹など）における有意差は確認できなかった。多面的な情報の供給や送金という経済的補助をもたらす在外家族が学生の意識にもたらす影響が大きいと推定される。

27) 在外家族の数は学生が回答した在外家族の滞在先である。たとえば一人の学生に在外家族が複数人いて「フランス、アメリカ、カナダ」と回答した場合、それぞれ別々にカウントした。

(5) 海外移住は幸運だと思うか

「海外移住は幸運だと思うか」という問いについては、別の項目ですでに検討済みである。再度要約すると、在外家族のいない学生は海外移住を幸運だと思う傾向がある。また、性別で見ると、男性に海外移住が幸運だと思う傾向が強いことが確認された。

(6) 留学希望の学生像とは

ここまで、統計的な有意差が確認された項目について検討し、浮かび上がってきた学生像をまとめると、次のとおりである。まず、在外家族を持たない者に留学希望の傾向が強い。在外家族がいない学生は、在外家族から得られるネガティブな内容を含めた情報にアクセスする機会がない。そのため、海外志向が高くなると推定される。そして、セネガル南部のジガンショール州出身者に留学希望の傾向が強い。この地域の留学希望者の特徴は無学歴や初等教育までしか終えておらず、おそらくは所得も低い父親を持つ学生が6割近くを占めることである。また、男性の方が女性に比べて留学希望の傾向が強い。そして、セネガルの生活に満足していない者、海外移住は幸運だと思っている者が留学を希望する傾向があるということも留学希望学生像の特徴である。

3. リヨンに留学しているセネガル人

実際に留学が可能であった学生について確認したい。以下、在リヨン留學生のプロフィールを明らかにする。リヨンの調査結果は、サンプル数が少ないことから、一般化は難しいと考えられる。そのため、以下の分析については慎重に扱う必要がある。

(1) 出身地域およびエスニシティ

在リヨン留學生の出身地域およびエスニシティは表11である。ここでも、ジョーラはジガンショール州出身者に集中し、ウォロフはダカール州およびその他の地域出身である。ダカール州出身者が44.4%、その他の地域出身者が44.4%であるのに対し、ジガンショール州出身者は11.1%であった。エスニシティ別ではウォロフが多く、回答者全体の45%を占めた。

表11 回答者の出身地域およびエスニシティ (在リヨン留學生) (単位:人)

	ジガンショール州	ダカール州	その他の地域	合 計
ジョーラ	5	1	0	6
フルバ	0	5	5	10
セレール	0	4	3	7
ウォロフ	0	10	12	22
その他	0	0	0	0
合 計	5	20	20	45

(出所) 筆者調査による。

(注) $\chi^2=37.115$, $df=6$, $p<.000$ 。欠損値=2。

(2) 家庭環境

兄弟姉妹については、在リヨン留學生においてもダカール大学生と同様、兄弟姉妹がいない学生は4% (47人中2人) と少なかった。また、兄弟姉妹数の最多は26人であった。兄弟姉妹数の

平均は6.8人であり、ダカール大学生 (平均6.5人) と大きな差はない。兄弟姉妹の中で占める位置もダカール大学生と同様偏りもなく多様である。

父親の職業は、役人が多く、40%を占める。また、教師の割合も多い。一方、ダカール大学生の父親に多かった農業は9%と少数であった。

また、回答者の父親の学歴で注目すべきことは、高等教育まで終えている父親を持つ学生が全体の52.5%を占めていることである。また、中等教育まで終えている父親を持つ学生も25%を占めており、これらが占める割合は77.5%である。一方、学歴なしの父親を持つ学生は22.5%であり、初等教育までの父親を持つ学生はいなかった。

フランスに家族がいる学生は、回答者全体の半数弱が在フランス家族を持つ学生であり、半数強は在フランス家族がいない学生である。在フランス家族がいる学生のうちの6割は、フランスにはいるがリヨンにはいないという学生であった。

(3) 経済状況

表12を見ると、在リヨン留学生のうち、65.9%がアルバイトをしており、アルバイトをしていない学生は34%にとどまった。一方、奨学金を受けているのは29.8%であり、70.2%の人が奨学金を受けていなかった。最も多いタイプは、奨学金は受けておらずアルバイトはしているというものであった。アルバイトも奨学金もなしという学生は23.4%にあたる11人いた。

表12 奨学金の有無とアルバイトの有無

(在リヨン留学生)

(単位: 人)

	奨学金あり	奨学金なし	合 計
アルバイトあり	9	22	31
アルバイトなし	5	11	16
合 計	14	33	47

(出所) 筆者調査による。

スイスに留学しているセネガル人学生のアルバイトについて触れている記事 [Le Soleil http://www.lesoleil.sn/specialdetail.php3?id_article=3809] によると、スイスに留学しているセネガル人学生においては、法定時間以上アルバイトをするのは当たり前だという。在リヨン留学生の回答者の平均アルバイト時間は週当たり17.69時間である。これは、フランス政府が定めている留学生の法定労働時間に近いが、回答者の中には上回っている者も多くいた²⁸⁾。アルバイトをする理由として、生活に困難であるという理由のほか、セネガルへの仕送りも考えられるであろう。しかし、セネガル人留学生の57.9%はセネガルにいる家族に全く仕送りをしていない [Ministère de l'Economie et des Finances 2004] ということから、現地での生活維持、学業継続

28) 在リヨン留学生の週当たりのアルバイト勤務時間は以下の通りである。0～9時間＝40.4%，10～17.5時間＝40.4%，18～35時間＝19.1%であった。アンケート調査中、当初は法定時間（一年当たり上限884時間）を答えた者で後になって「実は30時間働いている」と答えた者がいた。法に触れる行為であるため、事実を記入することを避けた回答者は他にもいたのではないだろうか。

が主な理由と考えられる。

在リヨン留学生の居住形態で一番多いのは一人暮らしで38%であるが、この中には公立大学生専用の住居も含まれている。ルームシェアをしている者は34%であり、一人暮らしおよびルームシェアをしているものが多くを占めている。

(4) 専攻分野

フランスに留学しているセネガル人留学生で一番高い割合を占めるのは、経済・経営学の専攻(26%)であった。経済・経営学は他のアフリカ諸国出身者においても常に上位である。次に高い割合を占めるのは、エンジニアとなるための科学技術専攻(17%)である [Alain Coulon, Saeed Paivandi 2003, 17-19]。表13が示すように、回答者においても専攻分野は、やはり経済・経営学が最も多いが、法学を学ぶ学生も多かった。学士課程が一番多いものの、修士課程の学生も多いことがわかる。

表13 回答者の教育課程と専攻 (在リヨン留学生) (単位:人)

	学士課程	修士課程	博士課程	合 計
法 学	4	4	2	10
経済・経営学	7	5	0	12
文 学	3	1	0	4
語 学	0	0	0	0
社 会 科 学	3	4	2	9
生 命 科 学	1	0	0	1
応 用 科 学	3	5	1	9
そ の 他	1	0	0	1
合 計	22	19	5	46

(出所) 筆者調査による。

(注) 欠損値=1。

(5) 性別および年齢

表14 回答者の性別と年齢 (在リヨン留学生) (単位:人)

	男 性	女 性	合 計
19～20歳	2	0	2
21～22歳	4	2	6
23～24歳	6	3	9
25～26歳	12	1	13
27歳以上	16	1	17
合 計	40	7	47

(出所) 筆者調査による。

表14を見ると、性別では男性が85.1%、女性が14.9%であった。年齢は男性の方が高い特徴があり、27歳以上の学生が全体の37%を占めている。平均年齢は男性26.1歳、女性23.7歳、全体25.7歳である。

4. 留学の希望と留学後の現実

本節では、留学希望の学生像と留学後の現実とを比較する。セネガル人留学生の直面する課題のうち最も深刻なものは経済的な困難である。そのような背景を考慮して、ここでは主として在フランス留学生の父親の学歴に焦点をあてて考察する。

表 15 は留学を希望するダカール大学生と在リヨン留学生のプロフィールを比較したものである。まず、在外家族の影響によって、ダカール大学生では在外家族ありとなしの比率は4:6となったが、在リヨン留学生では5:5であった。ダカール大学生においてはジガンショール州出身者に留学希望の傾向が強いという特徴があったが、在リヨン留学生においてはジガンショール州出身者の割合は低い。男女比は留学希望者と在リヨン留学生は同じであった。

表 15 ダカール大学生の留学希望の特徴と在リヨン留学生プロフィールの比較^{*1}

	ダカール大学生	在リヨン留学生
在外家族の影響	在外家族がいない学生が留学希望 あり：なし ^{*2} =4:6	あり：なし=5:5
出身地域	ジガンショール州出身者に多い Z:D:A ^{*3} =4:2:3	Z:D:A=1:4:4
性 別	男性に行きたがる傾向強い 男：女=8:2	男：女=8:2

（出所） 筆者調査による。

（注） *1 ダカール大学生では留学希望者の中での比率をあらわした。

*2 あり=在外家族あり、なし=在外家族なしをあらわす。

*3 Z=ジガンショール州出身者、D=ダカール州出身者、A=その他の地域出身者を表す。

ダカール大学生の留学希望者と在リヨン留学生を比較すると、ダカール大学生と在リヨン留学生のプロフィールにおいて明らかな差がみられる項目がある。それは父親の学歴である。前述の通り、父親の学歴については世帯の年収に大きな差を及ぼすと考えられる。在リヨン留学生の8割近くが高学歴な父親を持っているのに対し、ダカール大学生で留学を希望する学生では28.2%に留まっていた。一方、ダカール大学生で多かったのが、無学歴もしくは初等教育までしか終えていない父親を持つ学生であり、留学希望者全体の48%を占めた。それに対して、在リヨン留学生ではそのような父親を持つ学生は22%である。

留学は多くの出費および残高証明書の提出を要する。まず留学ビザを申請する時点でフランス留学の場合 280,000 FCFA（427.48ユーロ）以上の月収があるという証明が必要である [Le Soleil http://www.lesoleil.sn/specialdetail.php3?id_article=3808]。前述（表 7 参照）の平均年収を見てわかるように、月収 280,000 FCFA 以上という条件は高学歴者が世帯主でない限り難しい場合が多い。無学歴な父親を持つ学生がこの条件をクリアするのは容易ではないであろう。

ここで、一人の学生のインタビュー内容を紹介する。この学生は、カオラック州出身のウォロフで、両親共に学歴を持たない。父親は農業、母親は主婦で、7人兄弟姉妹の4番目である。彼以外は兄弟姉妹皆が無学歴もしくは中途退学している。彼は、アメリカでタクシー運転手をしている兄からの仕送りによってこれまで教育を受けることができたと言っている。では、彼はどの

ようにしてフランス留学を実現させたのであろうか。

一年間、セネガルのサンルイ大学に行ってたけどストライキが起きて、それが3ヶ月も続いた。勉強したくてもできないし、うんざりしてフランスに行くことにした。1998年に観光ビザでパリに降り立って1ヶ月間滞在した。お金もないし、フランスで学生ビザを取ることは不可能だった。だからまずはイタリアに行った。イタリアでの初めの2ヶ月間は modou-modou の生活（インフォーマルセクターに従事）してた。でもその生活は尋常じゃないしすぐにやめた。昼間は工場で働きながら語学学校の夜間コースでイタリア語と英語を勉強した。今は難しいかもしれないけど、その時はイタリアは移民を受け入れてたから簡単にイタリアに行けたんだ。セネガル人で2ヶ月ぐらいフランスで学生してたけど辞めてイタリアへ来た人も一緒だった。それで、お金も貯まったし、2000年の9月にフランスに学生として戻ることにした。リヨンに着いて一番困ったことは住まいだった。今回はお金はあったけど代理人がいない。2か月分先払いすると言っても、どこも取り合ってくれなかった。(28歳, 男性。リヨン第三大学, 修士課程, 法学専攻。)

この学生の場合、観光ビザでフランスに来たが、すぐにフランスの大学に在籍するのを断念し、まずイタリアに渡った。そして、ある程度経済的に余裕ができてから学生としてフランスに戻ったのである。彼は現在、弁護士を目指しており、「将来的にはセネガルに戻る気はあるが、かなり遠い将来の話だ。」と話していた。もちろん、これはひとつのケースに過ぎない。他の学生は正規のルートを辿ってフランスにやってきたのかもしれない。しかし、無学歴の親を持つ学生にとって、留学は希望していても簡単には実現することができないということが推測できる。

比較した結果をまとめてみると、典型的な留学希望の学生は、在外家族がおらず、貧困者比率の高いジガンショール州出身で学歴の低い父親を持つ学生である。一方、在リヨン留学生のプロフィールを見た限りでは、留学の実現を左右するのは経済的な側面が強い可能性が指摘できる。

結論と残された課題

以上、セネガル人において、留学希望の学生の特徴と、その要因がどのようなものであるか論証してきた。留学を希望する者には以下のような特徴がみられた。

- ・在外家族がいない。
- ・ジガンショール州出身者に希望傾向が強い。
- ・男性は女性に比して希望傾向が強い。
- ・海外移住は幸運だと思う人に希望傾向が強い。
- ・セネガルの生活に満足していない人に希望傾向が強い。

在外家族がいない学生は、在外家族がいる者が得られる情報にアクセスできないため、在外家族がいる学生との間に海外移住に対する意識の差がみられた。セネガル南部のジガンショール州

においては、貧困者比率が高いにもかかわらず就学率は高い。また、ジガンショール州出身者の特徴として、無学歴もしくは初等教育までしか終えていない父親を持つ学生が多く、それらの学生は全員留学を希望するという結果であった。性別でみると、男性に比べて女性はセネガルにとどまることを選択する傾向が高い。その要因としては、セネガルは高学歴女性が比較的働きやすい環境であるということが考えられる。セネガルの生活に満足していない人には、在外家族がいない学生が多い。在外家族がいる学生がセネガルの生活に満足する要因として、在外家族から得られる情報の他に、海外からの送金の影響が考えられる。海外移住に対する意識は、在外家族の有無や性別によって差異があることがわかった。

一方、実際に留学が可能であった学生たちは以下のようなプロフィールである。

- ・在フランス家族がいる者が半数いる。
- ・ダカール州およびその他の地域出身者が多く、ジガンショール出身者はわずかである。
- ・高等教育まで終えている父親を持つ学生が半数以上を占める。

データが少ないため、断定はできないが、高等教育まで終えている父親を持つ学生が半数以上を占めていることから、実際に留学するにはやはり経済的側面が要因として強く働いていると推測できる。

全体としては留学の希望と現実の間には落差は大きい。ジガンショール州出身者が貧困地域にもかかわらず高学歴者を輩出しており、留学希望者も高率であるが、おそらくは資金不足から、留学を実現できる者は少数である。

本論文では留学の希望者像の特徴を明らかにすることに留まっている。在リヨン留学生の約2割が無学歴の父親を持つ学生であったが、これらの学生がいかにして留学実現に至ったのかも大変興味深い。彼らについての研究は今後の課題としたい。

参 考 文 献

- 小川 了 (1998), 『可能性としての国家誌』世界思想社
- マイケル P. トダロ, ステファン C. スミス (2004), 『トダロとスミスの開発経済学』国際協力出版会,
- Michael P. Todaro (2003), Stephen C. Smith, *Economic Development*, Eighth Edition, Pearson Education Limited.
- Alain Coulon, Saeed Paivandi (2003), *Les étudiants étrangers en France: l'état des savoir*, Université de Paris 8 Centre de recherches sur l'enseignement supérieur
- Angèle Bassolé (2002), *La Problématique de la fuite des cerveaux en Afrique et l'éternelle question des femmes*, MOT PLURIELS (<http://www.arts.uwa.edu.au/motspluriels/MP2002ab.html#bev>) (2006年7月アクセス)
- Christine Renaudat (1998), *Les étudiants africains à Bordeaux*, CEAN
- Fatou Sow, Mamadou Guèye, Adama Fall et Ngagne Diakhaté (2000), *Les Sénégalaises en chiffres, Analyse des données socio-démographiques, économiques et politiques relatives aux femmes*, UNDP (United Nations Development Program)
- Francis N. Njubi (2002), *African intellectuals in the belly of the beast: migration, identity and the poli-*

- tics of exile*, MOT PLURIELS (<http://www.arts.uwa.edu.au/frozen/MotsPluriels/MP2002fnn.html>) (2006年7月アクセス)
- Guillaume Vuilletet (2005), *Comparaison internationale des politiques d'accueil des étudiants étrangers : Quelles finalités ? Quels moyens ?*
- Makhtar Diouf (1994), *Sénégal les ethnies et la nation*, UNRISD
- Ministère de l'Economie et des Finances (2003), BADIS, *Banque de données des indicateurs sociaux du Sénégal édition 2001-2002*
- Ministère de l'Economie et des Finances (2004), *Rapport de synthèse de la deuxième enquête sénégalaise auprès des ménages*
- Ministère de l'Economie et des Finances (2005a), *Situation économique et sociale du Sénégal Edition 2004*
- Ministère de l'Economie et des Finances (2005b), *Situation économique et sociale de la région de Dakar Edition 2003*
- Ministère de l'Economie et des Finances/Banque Mondiale (2004), *La pauvreté au Sénégal : de la dévaluation de 1994 à 2001-2002*
- Ministère de l'Education Nationale (2000), *Indicateurs 2000*
- OECD (2003), *Regard sur l'Education 2002*
- OECD (Organization for Economic Cooperation and Development) (2002), *International mobility of the highly skilled*
- Ozden Caglar, Schiff Maurice [editor] (2005), *International Migration, Remittances, and the Brain drain*, World Bank
- P. Antoine, P. Bocquier, A. S. Fall, Y. M. Guisse, J. Nanitelamio (1995), *Les familles dakaroises face à la crise*, ORSTOM, IFAN, CEPED
- Dakar University Web Site (<http://www.ucad.sn/>) (2006年7月アクセス)
- Webometrics Ranking of World Universities Web Site, "Top Africa" (<http://www.webometrics.info/top100-continent.asp-cont=africa.htm>) (2006年7月アクセス)
- MOT PLURIELS Web Site, (<http://www.arts.uwa.edu.au/motspluriels/MP2002index.html>) (2006年7月アクセス)
- Quotidien Le Soleil Web Site, « DÉLIVRANCE DE VISAS : Le Consulat Général de France à Dakar reste vigilant » (http://www.lesoleil.sn/specialdetail.php3?id_article=3808) (2006年7月アクセス)
- Quotidien Le Soleil Web Site, « ÉTUDIANTS SÉNÉGALAIS À GENÈVE : Entre études et apprentissage de la vie » (http://www.lesoleil.sn/specialdetail.php3?id_article=3809) (2006年7月アクセス)

本論文を執筆するにあたって、実に多くの方の援助をいただいた。留学中より所属していた l'AECAL (アフリカ人学生団体) のメンバーの助けによってフランスでの調査は実現した。本論文の核となるダカル大学での調査では、ダカル大学生たちが精力的に協力してくれた。調査から論文執筆まで、指導教授の大林稔先生ならびに副指導教授の中村尚司先生には有益な指導をいただくことができた。ここにご協力いただいたすべての名前を掲げる紙幅はないが、この論文が完成したのは、実に数え切れないほど多くの支援の賜物である。特に明記しておきたいのは、龍谷大学大学院経済学研究科からフィールド調査補助費 (2005年度)、ならびに龍谷大学親和会から海外研修奨学金 (2006年度) の助成をいただいたことである。深い謝意を表明したい。

(受付 2006年12月18日)